



TITLE:

[16-3]労働の季節的変動と経済距離

AUTHOR(S):

辻井, 博

CITATION:

辻井, 博. [16-3]労働の季節的変動と経済距離. DDニューズレター 1984, 16: 14-15

ISSUE DATE:

1984-05-30

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/236215>

RIGHT:

《 1 6 — 3 》

労働の季節的変動と経済距離

辻井 博

私の DD 村での研究の第一の目的は、一つの仮説をもとにして組み立てられていた。その仮説は、「同村の水田は全て天水田であるので、雨季には稲作が行われ労働利用機会が多く存在するが乾季にはそれが存在しないので、低雇傭ないし貧困が同期に顕著にみられるのではないか」と言うことであった。しかし、同村での乾季の低雇傭や貧困は、私の今回の観察や調査によれば存在しないようにみえた。この仮説を証明するために、調査表を用いて約50戸の農家に対して、雨季との比較における乾季の労働利用に関する簡単な調査を行った。この調査結果は、現在分析中であるが、この調査を通じての経験と、私の DD 村での過去2回にわたる調査での観察から、私の上述の仮説がどうも DD 村では証明されないのではないかと考えるようになったのである。

1981年の雨季に私は DD 村を訪問し、調査している。その時期には、農民達は、非常に忙しく稲作に立働いていた。今回、84年の3月の調査でも、乾季ではあるが、農民達は、色々な乾季の作業に忙しく立働いていた。とくに目立ったのは、非常にプリミティヴな機による綿織物や化学繊維織物、および絹織物がほとんど各戸の縁の下で行われていたことである。その機織は、だいたい老女から中年の女の人の仕事であった。また、多数の女達は、同村の古い河床にある水たまりの水を利用して野菜を作っていた。そこで穫れた野菜や、林や池からの採取野菜を老女達が近くのタープラの町とか、県首都コンケンの野市場へバスで持って行って販売するという仕事を多く行っていた。また、カエルとりとか魚とり、建設関係の単純労働も、村の中や村の近く、および、コンケン近郊の町でかなり多く存在しているようである。カエルや魚とりは、販売用に行う者が多いが、もちろん多少自家消費もしている。このように DD 村の男性も女性も、乾季であるにもかかわらずかなり忙しく立働いていた。このことの具体的、数量的なデータは、去年の6月から行っている毎日の村民行動調査のデータから明らかになるし、また、私が行った雨季との比較における乾季の村民の行動調査からも明らかになるであろう。

ただ、上で述べた「私の仮説が DD 村では成立しないかもしれない」と言うことは、客観的・数量的なデータには基づかず、私の観察と若干の数量的な裏付けからやや直感的・暫定的に推定されている。この仮説の否定は、何も東北タイの他の全ての村で否定されるということではない。私は、東北タイの乾季における農村の低雇傭・貧困に関する新しい仮説が立てられるのではないかと考えている。その新しい仮説と言うのは、すなわち、東北タイにおける農村の都市からの経済距離が乾季の低雇傭

や貧困の存在に密接に結び付いているのではないかと言うものである。この仮説は、DD村における観察から導き出されている。すなわち、DD村は、近郊村と呼べる村である。同村は、東北タイの一つの都市的中心であるコンケンから約 20 km の距離にあり、道路状況も良く、ソンテオと呼ばれる小型トラックを改造したバスで約 1 時間位、お金にして往復約 100 円位で行ける距離にある。このお金にして 100 円位で行けることが非常にクリティカルではないかと私は考える。このトラック改造バスの往復運賃に対して、コンケンでの工場労働者の賃金が 1 日約 500 円、先程例にあげた DD 村の老女の野菜販売の 1 日の売上げ高が約 1500 円であることを考えると、このバス代の安さが明らかであろう。すなわち、ある村から都市的中心への経済的距離が近いと言うことが、その村に色々な農外所得機会を与え、それによって乾季における低雇傭ないし貧困の問題が解決されていると考えられるのである。この所得機会は、もともとは村外の都市的中心からの所得であり、その所得が村にもたらされることによって村の中の所得機会もさらに増えると考えられる。このようにして、東北タイの都市的中心からの経済距離が近い村々では、乾季でも農外所得機会が多く存在し、そしてそれゆえに乾季においても低雇傭や貧困はあまりみられないということになるのである。しかし、このことは、逆に言うと、都市的中心から遠い村、例えば、50 km 以上離れた村では、こういう状態は成立しないということになるであろう。そのような村で、都市的中心へのトラック改造のソンテオの料金が往復 500 円以上になれば、それだけで工場への通勤兼業は、全く不可能になるのである。先程述べたように、コンケン近郊での工場労働者の 1 日当収入が約 500 円であることを考えれば、このことは明らかである。

ここで私は、将来の調査計画として、そういう村、すなわち、例えばコンケンからの往復料金が 500 円以上の村の乾季における調査をしてみたいという希望を強くもつ。東北タイにおける都市的中心からかなり離れた村における乾季の低雇傭ないし貧困の存在を多分証明できるのではないかと感ずる。

東北タイの都市的中心、例えばコンケンから経済距離が 50 バーツ以上、すなわち、500 円以上離れた村ではコンケンへの通勤は不可能であるから、バンコクとか、コンケンとか、中近東とかの遠い所へ出稼ぎに行く他は、兼業機会、兼業収入をえられない。だからそこでの農民は、そのように出稼兼業に出るか、それとも村にいて乾季の間は低雇傭と貧困とに直面するという選択が残されるわけである。ただここで問題なのは、都市での出稼雇傭機会が多く存在するかどうかであり、これは事実によって証明されなければならない。もし、都市において出稼雇傭機会が十分にあるとするならば、そういう都市的中心から遠距離にある村々でも、乾季でも低雇傭や貧困は存在しないであろう。

(以上は、学振に提出された帰国報告書からの抜粋です)